

# EFFECTOR

## For an inclusive Society

To Encourage Community Engagement • Volunteering • Sustainable Solution

02-03

変人 —変える人—

「ビジネス」を通じて社会を変える  
株式会社 Ayum 代表取締役 鹽井 晴香さん

04

龍谷大学発学生ベンチャー

「持続可能な流通モデルの構築」を目指す  
株式会社アカイノロシ

04

Soul food

近江米「みづかがみ」(滋賀県)



「ビジネス」を通じて  
社会を変える

株式会社 Ayum

しょいはるか  
代表取締役 鹽井 晴香さん

(国際文化学部 2014年3月卒業)

### Profile

高校時代から国際協力に携わり、大学進学後、カンボジア国内2社にてインターンシップを経験。将来は「カンボジアで教育・人材事業をしたい」と心に決めつつ、新卒で株式会社パソナに入社。派遣事業の営業として勤務、同時に社内にてカンボジア好きなメンバーが集まり日本でカンボジアの魅力を発信する「カンボジア部」、社外にて一般社団法人「Sokha Cambodia」(ソカ カンボジア)を立ち上げ。2018年7月に株式会社Ayum創業。結婚し2ヶ月でカンボジアに単身赴任。誰もが自分らしい働き方ができる社会創りを目指す。

## Interview

変人  
—変える人—「ビジネス」を通じて  
社会を変える

株式会社 Ayum  
代表取締役 鹽井 晴香さん  
(国際文化学部 2014年3月卒業)

## 大学

龍谷大学に入学する以前のことを  
教えてください。

**塩井** 継続して取り組んでいたことが2つありました。1つが14年続けたバトントワリング、もう1つが15年続けたボーイスカウトです。2つの取り組みの共通点は、社会に貢献できる人になるという軸でした。

バトントワリングの先生が、世のため人のために役立つ人間になるように、ということを常に仰っており、ボーイスカウトの目的は、社会に貢献できる青少年を育成することでした。自分の核となるものを作ってくれたのはこの2つだと思います。

ボーイスカウトでは  
大きな賞を取られたと伺いました。

**塩井** 年齢に応じて様々なセクションがあるのですが、ベンチャースカウトという中学校3年生から18歳までの年代



で、100人に1人しか取ることができないと言われる「富士章」を受章し、皇太子殿下を表敬訪問する機会をいただきました。高校2年生のときです。

各都道府県の選抜者が集まる全国大会や、国際会議があり参加者として選抜してもらいました。基本的に大学生が選ばれるので、高校生が私1人だったのですが、その中でリーダーを務めました。

大学生の中で高校生の塩井さんが  
リーダーをしていたということですか。

**塩井** そうです。小学校6年生のときから中学生を含めたチームのトップに立っていました。年齢で決めるのではなく、成果を残した人がリーダーシップを発揮しチームをまとめるという経験を持てたことが大きかったと思います。

## 自身のリーダーシップが優れているのでは、と思っていたのでしょうか。

**塩井** 正直、自分はトップに向いていないのではと思うことも多かったです。私の接し方は当時とても厳しく、チームの男の子を泣かせてしまったこともあります。自分のマネジメント方法に限界を感じ、トップに立つべき人間ではないかもしれないと考えていました。ただ、きちんと行動できない人には任せられないという葛藤もありました。

国際交流と関わるようになったきっかけは  
どのようなものだったのでしょうか。

**塩井** 高校2年生のときにカンボジアの内戦を題材としたドキュメンタリーを見て、衝撃を受けたのがきっかけです。ボーイスカウトを通じて、外国人と触れ合う機会は多かったのですが、その国の背景については全く知りませんでした。自分が何もしていないことにいら立ち、その日の夜にwebで教育支援を行っている団体を見つけて、すぐに参加しました。

現場をより理解して、そこに対して解決のための具体策を知り、自分がどのように行動すればいいのかを知りたいと考えていました。

その団体では、パプアニューギニアの教育支援に間接的に関わり、紙芝居や現地で行う運動会のプログラムを作る啓蒙活動をしていました。一方で、本当にボランティアは必要なのか、募金活動は一方的なのでは、と仲間と一緒にずっと議論をしていました。その中で大学では国際協力学を勉強すると決めました。

なぜ進学先として  
龍谷大学を選ばれたのか教えてください。

**塩井** 目的と目標を明確に持った上で進路を決めようとしてきました。中学校のときに両足を手術しスポーツができなくなった経験があり、弱くてもいいので毎日バトントワリングができる環境に身を置きたいと高校を決め、大学進学時には人を喜ばせるために必要な技術力を得たいと考え、バトントワリングが強く、国際協力を学べるという二つの条件で龍谷大学を選びました。

ボーイスカウトのおかげで、色々な大学へ行く選択肢をいただいていたのですが、自分が何をするのかを基準にして判断すべきだと思いました。だから大学選びにあたっては迷いは全くありませんでした。

大学に入ってから、  
入学前後のイメージに落差はありましたか。

**塩井** ありません。指導してくださる先生に恵まれたことにも感謝しています。私は中根 智子先生のゼミに所属していました。ゼミの1期生だったのですが、本当にしたかった勉強をさせてもらえたことは非常に大きかったです。

先生は非常にフランクで、ただ聴いて学ぶのではなく五感を使って学びなさい、どんどん大学の外に出ていきなさいと仰り、後押しをしてくれていました。

## 大学の授業で印象的な出来事を教えてください。

**塩井** 大学の授業で、時間をいただき「サンデーモーニング」でコメンテーターを務めている、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんに自分でコンタクトし、お招きしたことがありました。安田さんは16歳の頃からカンボジアで取材をしておられ、授業でお会いした後にカンボジアへ一緒に行かないか、と誘っていただきご一緒する機会に恵まれました。今も繋がりがあり、先日安田さんがカンボジアに来られたときもお会いするなど仲良くして頂いています。

国際協力学を学びたいと入学されたとの  
ことでしたが、勉強されたことについて  
具体的に教えてください。

**塩井** 当時はBOP(base of the economic pyramid)と言われている層の人たちの支援に興味がありました。

安田菜津紀さんとカンボジアを訪問したときのご縁で、大学3年生のときにカンボジアにある企業でインターンシップをさせてもらいました。これまで物資支援や金銭的な支援をしていたのを、農村部からの雇用を生み出していく

プロセスに関わることで、支援が当たり前と思っていた人々が自分で働く中で、物資をとても大事にするようになったのを目の当たりにしました。ボランティア活動は「良いこと」というイメージがありますが、相手にとって本当に良いことなのかが分からなくなり、事業として成立するビジネスの中で、雇用を通じた対等な関係で人を成長させていくことのほうが、大事ではないかと思うようになりました。社会課題を解決するために自分はビジネスをする、という信念を持って働くことが重要だと思うようになりました。

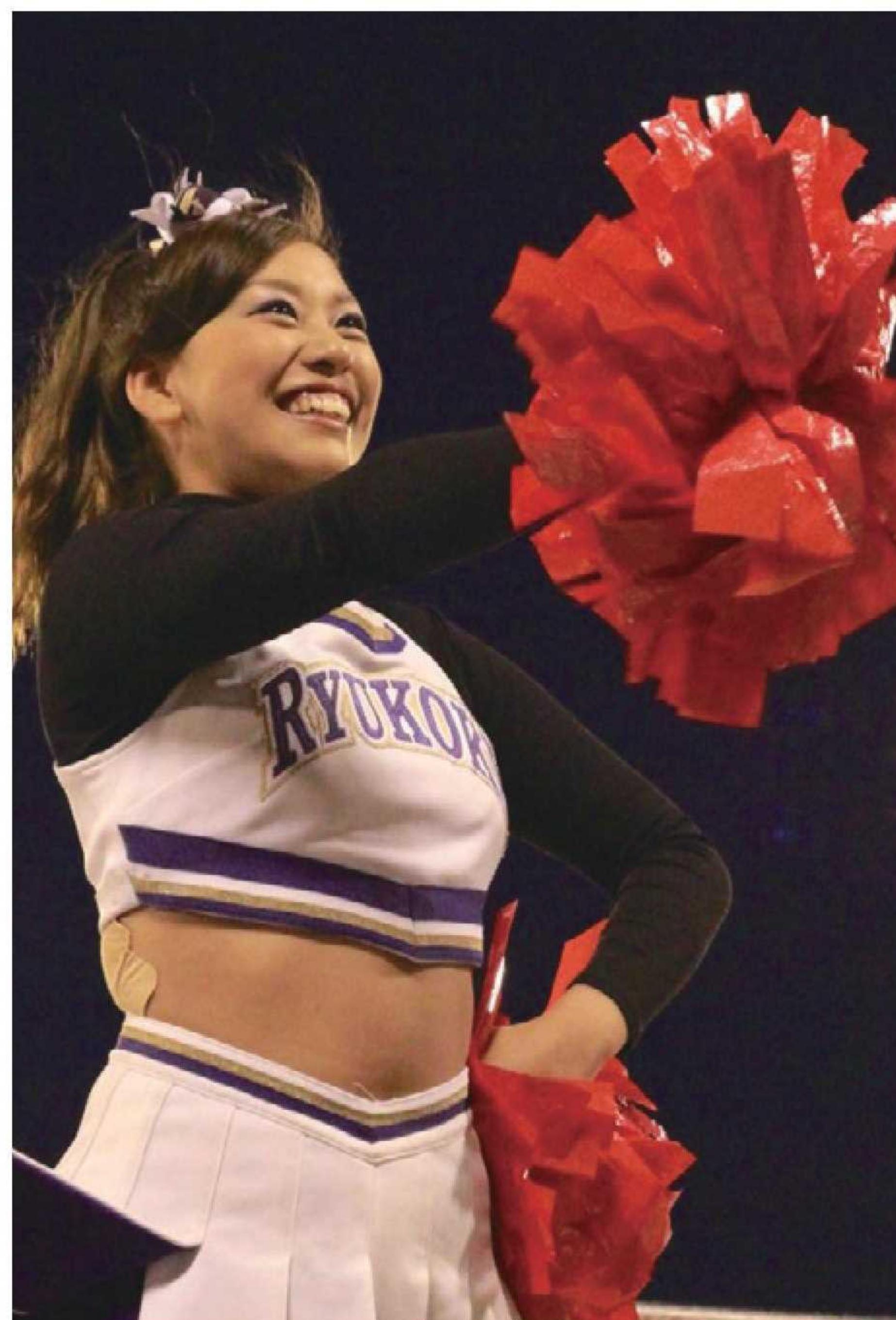
### 大学での課外活動、バントワーリングについて教えてください。

**塩井** 高校時代に全国大会出場等の実績があるメンバーの中で、自分がバントワーリングに取り組むことはとても厳しく、プレッシャーがありました。

けがをしやすい体質で、高校3年生のときに椎間板変形症、脊椎分離症になり、麻酔の注射を4年間で100本以上打ち、骨折をしてもテープニングをして練習しました。

ただ、どうしてもやりたかった研究をしようと思うと、課外活動との両立ができず、4年生の夏にあった公演まで続けて、そこから学業に専念しました。

元々この大学に来た理由は、バントワーリングと国際協力の両方ができることが自分で決めたことでした。自分の中でも両方をやり切ったと思い卒業したいと考えました。



## 就職活動

### 就職活動のことを教えてください。

**塩井** 就職活動へ向けた準備は2年生から行っていました。当初は野球の社会人チアリーダーをしたいと考えておらず、色々なチアリーダーの人々に連絡を取りお話を伺いました。内部でチアリーダーを抱えている企業とそうでない企業がありますが、外部からの参加は難しく、チームのある大手企業に入社する必要があることがわかりました。恐らく、大手に行けるような能力はないと考え、先輩の就活生に交ざって説明会に行き、選考も受けました(笑)。

しかし、チアリーダーを軸に就職先を検討していくために、勤務先の本来の業務内容に興味が持てず、自分が本当にしたいこと、すべきことは何かを考えたタイミングの、3年生の4月に、パソナという会社に出会いました。

### どのような会社だと感じたのでしょうか。

**塩井** 会社説明会で、社会の問題点を解決するという企

業理念を持ち事業を行っており、皆、同じ気持ちで働いているという話を聞いたとき、私が求めていたのはこれだと思い、その瞬間に、私は絶対にこの会社に入ると決めました。その後の就職活動もパソナに行くこと以外は考えていませんでした。

### 企業理念が立派な会社や組織はたくさんありますが、理念がどのように実現されていると感じましたか。

**塩井** パソナでは各事業が社会問題を解決するためにつくられており、40数年前に女性がなかなか就職できない、出産後正社員として復職できないという社会の中で新たな、働き方を創れば女性も活躍できるという問題意識で、人材派遣というビジネスモデルを日本で構築したことが原点です。

社員もただ人材業界志望というだけでなく、社会課題を解決するためにパソナに行きたいという人が圧倒的に多いことが驚きました。社員が1万人弱、グループ会社も60社を超えていますが軸はぶれておらず、入社してからもいいギャップしかありませんでした。

### 就職活動をされていた時期は、ソーシャルビジネスを行う事業体が増えている時期だと思います。就職先について迷いは特にありませんでしたか。

**塩井** ありませんでした。揺るがなかった点が2つあります。1つは将来、カンボジアで教育と人材の分野に取り組むと決めており、人材ビジネスで成果を出している会社で学び、どこでも通用するような力を付けたいということです。もう1つは、ベンチャーか大手か考えたときに、結果的に大手で働いた方が様々な資源を活用できると思いました。

社内はとても自由な風土で、私は1年目の終わりに「カンボジア部」というカンボジアが好きな社員の集まりを作り、十数名の仲間と会社の会議室を使ってイベントを始めたのですが、役員をはじめ皆応援していただき、最終的に社団法人を作りました。

パソナでは最近、「ドリカム休職制度」という、社員一人ひとり夢の実現に向けチャンスをひろげる休職制度ができ、それを利用して起業しました。何かが起きたときに戻ることができる安心感によって、頑張ることもあると思います。

## 起業

### 起業時にも出資等の支援を受けているのでしょうか。

**塩井** パソナとは資本関係は結ばず、完全な別会社として起業しています。資本があると色々な意味で楽ですが、最初からハードな方法で取り組んだほうが成長できると考え、あえて厳しいほうを選びました。

### ビジネスに取り組む中で、見えてきたものを教えてください。

**塩井** 日系企業で働くカンボジア人が増えてきましたが、日本人とカンボジア人の感覚は異なり、その溝を埋めるための研修事業をしています。発生する問題には、カンボジア人と企業の双方が持っている原因があります。それを解決するアプローチは、現地に腰を据えカンボジア人と向き合って取り組まなければ分からなかったことだと思います。

また、大学でBOP層の研究をしてきましたが、中間層とトップ層を変えなければ、国の成長が難しいと思うようになりました。

20代の人々の親世代は皆、1993年に終結したカンボジア内戦の真っただ中を生きています。国内の知識人が全て殺された背景もあり、現在の若い世代はオフィスワーカーとして生きるイメージを持つことが難しいように思います。

中間層とトップ層を変えるアプローチとして外資系の企業の進出を促し、雇用を生み出し、先進国から学ぶことへのサポートをしたいと考えています。

### 海外で起業するにあたって、人的ネットワークは、どのように構築してこられたのでしょうか。

**塩井** 学生時代から7年間かけ培ってきたものです。現地は日々、変わっていくので、年に2回は必ずカンボジアに行き、できる限り知っている人に連絡して会うようにしていました。

### カンボジアはトランスペアレンシー・インターナショナル(国際透明性機構)が発表している「腐敗認識指数」が、ASEANで最下位になる等、汚職が話題になる国でもあります。

**塩井** そうですね。でも、やはりこれまでの活動が活き、様々な方にサポートしていただきました。通常であればエージェントを通して登記する方がほとんどですが、弊社ではカンボジア人取締役がいたことも大きいと思います。

ただ、それでもいろいろな問題が発生します。登記すると資本金が実際と異なる金額で書かれたり、書類到着に1ヶ月かかるなど、その書類に書かれている支払期限が翌週だったりしましたが、色々なことがスムーズにはいかない前提で受け止めています。2週間でできますと言われると、2ヶ月位かな、という感覚で受け止めています(笑)。

## 今 後

### 会社の今後について教えてください。

**塩井** “可能性を引き出し共に歩む”を会社のミッションとして掲げています。

カンボジア人に雇用を提供するのではなくて、キャリアについて一緒に考え、その人の持つポテンシャルを発揮するサポートをする、寄り添える関係性を持つことができる会社をつくっていきたいと思っています。

また、働き方や生き方の多様化を目指し、副業をするためのプラットフォームや国内にほとんど存在しない保育園、福利厚生関連のサービスもつくっていきたいです。カンボジアで人が働く上で不便だと思っている問題を解決し、カンボジア人の選択肢を広げる様々な働き方をつくっています。



### 海外から日本を見ていて感じていることを教えてください。

**塩井** 危機感を持つ日本人が圧倒的に少ないを感じています。東南アジアは途上国と思われているかもしれません、Top層は日本人より優秀です。その人たちが日本では働きたくないと言い始めています。

そのため、当初はカンボジア内で完結するビジネスをする予定でしたが、今は日本の学生向けに、日本に閉じこもっている状況を打破するビジネスを開拓しようと思っています。

日本人が外国に転勤になった時に、退職希望者が50パーセントを超えるというデータがあります。外に出ない、外から来るものを受け入れたくない層を変えていかなければいけないと思い、日本人向けのグローバル研修プログラムを今は作ろうとしています。

ありがとうございました。



**龍谷大学発  
学生ベンチャー  
株式会社  
アカイノロシ**

本学の現役学生である矢野龍平さん、三輪浩朔さん(いずれも政策学部4年)が10月に起業したばかりの株式会社アカイノロシ。

麻薬の生産地として有名な、タイ、ラオス、ミャンマーと国境を接する「ゴールデンライアングル」と呼ばれる山岳地帯。国策として換金作物への転換が奨励されているにもかかわらず、収入につながっていない現状。麻薬やコーヒーは基本的に先進国の需要に応えて作っているのに、現地の人が豊かにならないのは、日本の問題と捉え、起業。

事業のアイデアは、2017年度の「龍谷大学ビジネスプランコンテスト プレゼン龍」で準グランプリを受賞。

2018年度の同イベントでは、「微笑みの国タイで、笑顔が消えた日の話」というテーマで起業の経緯や大学生活、今後の展望について熱く語った。会場はコーヒーの香りと2人の熱気に包まれた。

二人の今後が楽しみである。



**株式会社アカイノロシ**

政策学部4年の2名で2018年10月に設立。タイ北部チェンライの少数民族「アカ族」が作ったコーヒー豆の卸売・販売を通じて、世界中に存在するヒトやモノが正当に評価され、後世に残っていく「持続可能な流通モデルの構築」を目指す。会社名の由来はアカ族のコーヒーで社会に対し「のろし」を上げること。



**Soul Food**

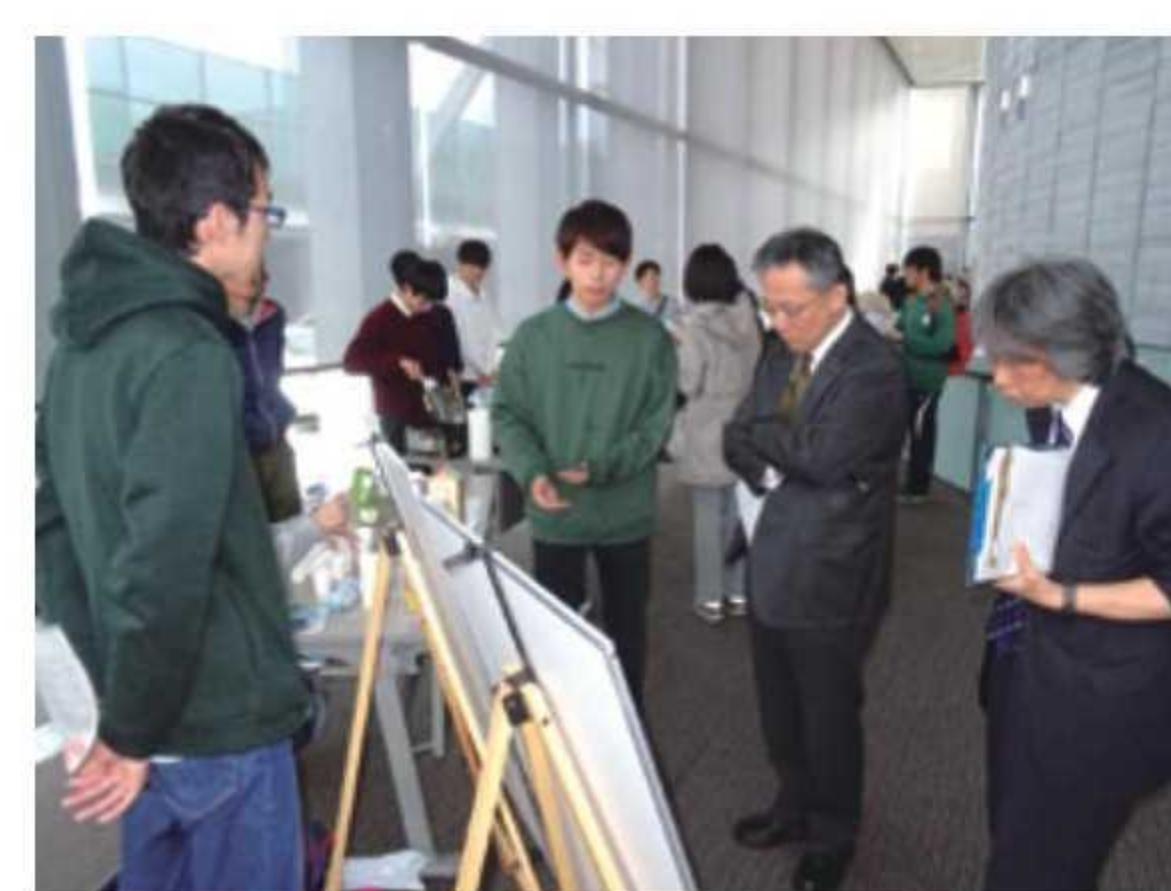
**近江米  
「みずかがみ」  
(滋賀県)**



龍谷大学農学部では、2017年12月からコンビニ業界大手の株式会社ローソンの協力を得て「新しいお米のカタチプロジェクト」に取り組んできた。このプロジェクトは、お米の消費量が低迷する中、お米を使用した新しい調理法や加工法、海外への販売戦略、米農家経営などの農業デザインも含め、アイデアを企画する取り組みである。



2018年12月16日(日)には、本学瀬田キャンパスにおいて、このプロジェクトの成果報告会が開催された。農学部生が約1年間にわたって取り組んできた研究成果をポスターセッションで発表、審査員による評価のち、表彰式が行われた。



滋賀県主催の「もっと食べよう近江米フォーラム」も同時開催された。三日目大造滋賀県知事と伏木農学部教授との対談や日本を代表する京都の老舗料理人との「お米」をテーマにしたトークセッションが行われた。



**滋賀と米の歴史**

滋賀県の米作りの歴史は古く、平安時代に、隣接する京都が都として栄え、近江の米が「登せまい」と呼ばれ、琵琶湖の湖上交通が発達。歴代天皇の即位の大礼に際しては、献上米である神饌のための神田を置く悠紀国として、平安中期以降近江国が定められていた。



昭和天皇即位式に統いて行われた大嘗祭にちなんだ「悠紀斎田 お田植まつり」(野洲市三上)

**みずかがみ**

稲作を中心に発展してきた滋賀県の農業。滋賀県内では様々な米が栽培されている。

みずかがみは2013年に現代の環境の変化に対応する温暖化対応品種として育成。高温に強く、猛暑の年でも品質が安定するとともに、ほどよい粘りとまろやかな甘み、冷めてもおいしく、おにぎりやお弁当などでもお米本来のおいしさを味わえる。

平成27・28・29年産米食味ランディングにおいて最高ランクの「特A」を3年連続で獲得。琵琶湖をはじめとする滋賀の自然環境に配慮して栽培され、「環境こだわり農産物」の認証を得ている。